

町長や町會議員や、辯護士や醫者や、町の有志連中が、樂屋に集つてゐる。

聽衆は一杯だ。

赤黒のゴム版を彫らしてそれを自分で刷つた名刺を、僕は一枚宛配つたりした。

禿頭の町長が、最初に報告演説をやる。

反對派の議員が慷慨演説をやる。

僕もやるからと言つて墨汁で、

南無鐵道、舐瓜と紙に書く。

頼さんも議員なのだ。

君はやらない方が好いだらうと言ふ。

四五人濟んだ。

僕は腰掛の上にてゐたが、退屈になつたので廊下を廻つて、傍聽席の後方へ坐つた。

羽織の紐をいちぢりながら、辯士が物を言はずに居るので、まだるっこくて不可ない。

「時間を勞費するな、ハッキリした事を言へ」と僕は彌次りまくつた。